

巻頭言

国際教育センター長 阿部仁

留学生センター長（2000～2008年）および国際教育センター長（2010～2016）として長きに渡り組織を牽引されてきた五味政信先生が2016年3月末に定年退職された（先生は今年度も引き続きセンター特任教授として日本語教育部門で奉職中）。これに伴い2016年2月より2年間センター運営管理責任者としての任務を拝命したが、センターの運営の礎としてたゆまぬ努力を重ねて来られてきた五味先生のご苦勞を日々思い知らされている。国際教育センター活動の年次総括ともいえるこの巻頭言の執筆もまたそのひとつかもしれない。

2016年5月1日の時点で一橋大学に在籍する外国人留学生の数は734名で在学学生数の11.7%を占めている。内訳は、学部留学生が192人（26%）、大学院留学生が425人（58%）、交換留学生が117人（16%）である。5年前（2011年）の在籍者数と比べると留学生全体では18%増加した。中でも交換留学生のここ5年の増加率（95%増）が群を抜いて大きいのは、一貫して見られる本学の特徴的な傾向である。一方で、2015年度に海外に留学する本学の学生は短期（休業期間）留学が310名、長期（一学期以上）の派遣留学が105名となっており、在学学生数の約7%を占めた。昨年度休学して自主的に留学した学生23名も加えると年間合計で438人が海外に留学したこととなる。2011年度に海外に留学した本学学生は198人であったことを省みれば、この4年間で派遣留学の実績は倍増した。

留学生の受入れならびに本学学生の派遣留学規模が拡大する中、2015年度のセンターが取り組んだ主な事業について振り返りたい。まず、日本語教育部門では、2012年に行った日本語科目群の技能別、レベル別の整理以降、授業の拡充を図り、2015年度は夏学期に週当たり65コマ、冬学期に週当たり45コマの留学生向け日本語科目を提供した。授業内容についても、各学期に実施するセンター独自の授業評価アンケートによって学生からのフィードバックを受け、各担当教員が授業改善を行っており、学生のニーズに合った質の高い授業の提供を目指している。また、センターが得意とする専門日本語教材開発の成果として、『留学生のためのジャーナリズムの日本語』が新しく刊行された。さらに、2005年に刊行した『専門分野の語彙と表現 経済学・商学編<改訂版>』は、当初、300冊発行したが、履修者数が順調に増加し、2015年度に第4刷、300冊の増刷を行うこととなった。

留学生・海外留学相談部門では、参加型で学生に異文化を体験させる目的で短期海外研修を2005年度に開講し、現在では豪州、中国、韓国、スペインへの4プログラムを企画運営しているが、多文化社会において求められるスキルの習得を意識してより特色のある授業として中国プログラムを刷新することとなった。具体的には、2016年度よりグローバルな学習環境を考慮して中国語講座の開催場所を北京大学から本学協定校である香港中文大学に変更する。同時に中国語講座の実施期間を4週間から3週間に短縮し、香港中文大

学生と本学学生のジョイントによる1週間のインターン型教育プログラム（使用言語：英語）を実施予定である。これにより既存のスペイン企業派遣プログラムとともに、英語によるプロジェクト参加型のプログラムを夏季、冬季休業期間中に提供できるようになった。

国際交流科目部門では、HGP 全体の開講科目数が 125 科目（前年度比 7 科目増）となり、そのうち英語で行われる科目が 106 科目（前年度比 7 科目増）と初めて 100 科目を超えた。2015 年度は、商学部と経済学部だけでなく、法学部、社会学部も英語による科目を増やしてくれたことが全体的な増加につながった。

このように 2015 年度も様々な取り組みを行ってきたわけだが、気がつけば 2016 年度も四半期がすぎようとしている。ここからは、今後国際教育センターが取り組むべき課題についても触れてみたい。日本語教育部門では、4 学期制への移行を見据え、レベル別、技能別の日本語プログラム全体の見直しが迫られる。これまで日本語科目群の整理、授業内容の拡充を図ってきたが、その蓄積を、より質の高い授業の提供につなげることが課題となるだろう。留学生・海外留学相談部門では、増加しつづける派遣留学に関する相談対応がようやく安定的に稼働してきた。入口の支援が形として出来上がった今、次なる課題は派遣留学に参加する学生の成長を渡航前後のオリエンテーションプログラムを通じ、いかに促進していくか、そして彼らが帰国した後にこれらの成長をキャリア（自分らしさ）形成にどうつなげていくかが重要課題となる。国際交流科目部門では、学部 GLP が提供する英語による専門科目と国際教育センターが提供する英語による日本事情関連科目（国際交流科目）の連携を図り、HGP 全体としてより魅力的な科目群をいかに構築できるかであろう。商学部 GLP とは、新入留学生オリエンテーションでの情報提供など協力体制を試行している。

最後に、冒頭でも申し上げたとおり 2016 年 3 月末をもって五味先生が定年退職された。紳士的でユーモアあふれるお人柄が職場の雰囲気をも温かく保ってきたといっても過言ではない。同じく HGP 発足直後より主に交流学生を対象とした HGP 日本語プログラムの発展と交流学生支援に昼夜を問わずご尽力くださった二宮理佳先生が中央大学に転出された。五味先生と二宮先生の多大なる貢献に心より感謝を申し上げるとともに、今後の益々のご活躍を祈念する。二宮先生の後任は、松井咲子先生がセンター特任講師として 2016 年 4 月 1 日付けで着任され、HGP 日本語プログラムの運営にご尽力いただいているのは大変心強い。2016 年度の国際教育センターは専任教員 6 名、兼務・特任教員 7 名の 13 名体制で、本学における国際教育交流の促進、すなわち学生に「アウェーで活躍できる自信」を習得してもらうために日々邁進している。

2016 年 6 月